

香りの表象

——『源氏物語』梅枝巻における源氏と蛭宮のやりとりをめぐって——

武 居 辰 幸

—

『源氏物語』梅枝巻にて、正月の閑暇に薫物合せが六条院で催された。この儀は光源氏の愛娘・明石の姫君の入内に向けた準備の一環として行われ、源氏に依頼を受けた女君たちが調査した各々の薫物は、源氏と弟君の蛭兵部卿宮の二人によって、その微妙な香りの違いが判別された。薫物合せが行われた夜、源氏は、蛭宮、子息夕霧、柏木とその弟の弁少将とともに月明りの下、管絃の遊びに続けて盃を交しながら歌を詠みあった。明け方になって蛭宮が自邸への帰路に着くが、その際、源氏と次のようなやりとりを交している。

まことに明け方なりてぞ、宮歸りたまふ。御贈物に、み

づからの御料の御直衣の御よそひ一領、手ふれたまはぬ薫物二壺添へて、御車に奉らせたまふ。宮、

花の香をえならぬ袖にうつしめて事あやまりと妹やとがめむ

とあれば「いと屈じたりや」と笑ひたまふ。御車繫くるほどに追ひて、

「めづらしと古里人も待ちぞみむ花のにしきを着てかへる君

またなきことと思さるらむ」とあれば、いといたうからがりたまふ。

(梅枝③—四一二)⁽¹⁾

源氏は、薫物合せの判者を務めた蛭宮への贈物として、自身

の直衣の装束―揃いと薫物を二壺、螢宮の車に載せた。螢宮は「花の香を…」と、その贈物のすばらしさとそうした贈物を所有する源氏を賛美しながら、芳しい香りのする装束を持ち帰ると、家で待つ「妹」(妻)にどんな女と過ちがあつたのかと疑われてしまう、という歌を詠む。対して源氏は、ずいぶんと気が滅入っているのですね、とでも言うかのように、「いと屈じたりや」と笑い、牛車に乗って帰る螢宮に、そのような素晴らしい装束を持ち帰れば、家で待つ「古里人」も珍しがることでしょうという意味の「めづらしと…」の歌を詠み、螢宮をからかっている。

しかし、現行の諸注釈は「いと屈じたりや」もしくは「いと屈じたりや」と、いずれも「屈」の字をあてて本文を立てているが、「屈じたりや」には諸本における本文の異同が多く見受けられるため、本文それ自体を再検討する必要があるのではないかと考えられる。また、現行の諸注釈では、「いと屈じたりや」は、螢宮が家で待つ「妹」(妻)に何か言われるのではないか、という「花の香を…」の歌に対する言葉として、心が塞ぐ、気が滅入る、しよげる、といった意味で、「ひどく気が弱いのですな、というほどの冗談」(『新全集』頭注七)というような解釈がなされてきた。だが、今ひとつ意味を取りにくく、すつきりとしな。

二

まず、「いと屈じたりや」の箇所の諸本間の異同を見てみよう。『源氏物語大成』が底本として大島本では「いとくつしたりや」とあるが、複製を見ると「くつしたりや」の右に「苦したるや也」と傍書されており、底本とした大島本にすでに本文の揺れがある。さらに校異によると、青表紙本系統では、くんしたりや―御物本・横山本・池田本・三条西家本くしたりや―肖柏本とあり、河内本系統では、

くむしたりや―河内本(七毫源氏・高松宮家本・尾州家本・大島本・甘露寺親長筆本)

く□したりや―鳳來寺本

くむしたり(り)や―岩国吉川家本

さらに別本では、

くしたりとて―麥生本・阿里莫本

くんしたりやと―国冬本・三条西家本・尾州家河内本

くつしたるやと―桃園文庫本

とあるように、三系統それぞれの中でも少くない異同が見受けられる。

ここで注目したいのは、青表紙本系統の御物本・横山本・池田本・三条西家本が有する「くんしたりや」と、肖柏本の「くしたりや」そして河内本の「くむしたりや」である。『新全集』

の校訂付記には、底本大島本の「くつしたりや」を右記の青表紙本系統のそれら五本と、桃園文庫旧蔵伝明融筆者臨模本九帖、宮内庁書陵部所蔵三条西実隆奥書本五十四帖、陽明文庫所蔵伝後柏原院等筆者本五十二帖、吉田幸一氏所蔵本五十四帖によつて「屈じたりや」に改訂したとある。「くつし」を「くんし」という校訂方針そのものは正しいものと思われる。ただし、「くんし」に「屈」の字をあてて「屈じ」としてしまふのはいささか早計なのではないだろうか。

「屈ず」という動詞は、次のような確かな用例が認められる。

(イ) いと久しう鳴りて、すこしやむほどには、くらうなりぬ。只今、猶此返事たてまつらんとて、取むかふに、人々上達部など、神の事申にまいり給へれば、西面に出居て、物聞えなどするに、まぎれぬ。こと人はた、さして得たらん人こそせめとてやみぬ。猶此事に宿世なき日なめり、屈じて、「今はいかで、さなむ行きたりし、とだに人におほく聞かせじ」など笑ふ。

(枕草子——一三二)

(ロ) 行く先の身のあらむことなどまでも思し知らず、ただ年ごろたち離るるをりなうまつはしならひて、今は亡き人となりたまひにけると思すがいみじきに、幼き御心地なれど、胸つとふたがりて、例のやうにも遊びたまはず、

昼はさても紛らはしたまふを、夕暮となれば、いみじく屈したまへば、かくてはいかでか過ぐしたまはむと慰めわびて、乳母も泣きあへり。

(若紫①——二四九)

(イ) は、五月の御精進の際に、和歌を詠もうとするも、雷が鳴りそれを見舞う上達部などさまざまな人の来訪によつて、歌のことがとりまぎれてしまい、歌のことに縁のない日のようだ、と気が滅入ったという意である。

(ロ) は、幼き日の紫の上が、それまで常に側にいた尼君が亡くなりたまらなく悲しいために、夕暮れになるとひどくふさぎ込んでしまふの意である。

しかし、以上のような、心が塞ぐ、気が滅入る、しよげる、といった意味の「屈ず」として解釈すると、源氏の「いと屈じたりや」は、蜚宮に対する返しとして、いささか踏み込んだ、言い換えれば揶揄するような言葉となつてはしまわないだろうか。蜚宮と源氏のやりとりは、六条院にて行われた薫物合せ、男性官人たちとの月下の宴遊と連続する雅やかな場面の最後で交されたものであり、その際にあえて源氏から蜚宮に向けて、「いと屈じたりや」という言葉を投げかける必要はないように思われるからである。

次に、この「くんし」を「屈じ」として読む従来の解釈について、冒頭に掲げた場面に即しながら見ていこう。

従来の注釈ではいずれも、「妹」を怖れる蛭宮の詠んだ「花の香を：」に対して、弱気ですなとからかうような源氏の言葉として解釈することでどれも共通している。

古注釈において「いと屈じたりや」に注を施したのは『細流抄』が初めて、現行のいずれの注釈書も『細流抄』の指摘した説をもとに解釈しているところが多いようである。

くつしたりと也いもやとかめんといへるをわらひ給也

〔細流抄〕

ひどくしよげてゐますね

〔古典全書〕頭注二四

「妹や咎めん」などと、大層、しよげておりますねえ、

御身は

〔旧大系〕頭注十五

ひどく気が弱いのですな、というほどの冗談

〔旧全集〕頭注九、〔新全集〕頭注七

（奥方を怖れて）ひどく弱気ですな

〔集成〕頭注十八

源氏の言。大変な恐妻家ですな

〔新大系〕頭注十二

諸注ともに、ずいぶんと滅入っていますね、気が弱いですな、といった解釈になっているが、そのように考えた場合、前述したように、蛭宮に対する返事としては、いささか踏み込んだ、言い換えれば、源氏が蛭宮を揶揄する言葉になってはいないだろうか。この時点で蛭宮に妻はいないにも関わらず（後述する）、源氏がこのような揶揄のことを口にするには、それが冗談であつたとしても、ちぐはぐな印象を拭えない。

また、蛭宮と源氏とのやりとりがどのような状況で行われたのかもはっきりとしない。蛭宮の歌の直後に「とあれば」「御車繫くるほどに追ひて」とあるのはどのように解釈するべきであろうか。二人のやりとりはお互いが相対した状態でのことなのか、それぞれ離れた場所でのことなのであろうか。

「とあれば」という表現からは、蛭宮の詠んだ「花の香を：」の歌が、紙か何かに記してあつたか、それとも、従者がとりついだかのように取れる。「御車繫くるほどに追ひて」も、車に牛をつけるところを追いかけていった、という意味なのか、蛭宮の歌に対して「いと屈じたりや」と笑つたのに続けて、という意味なのか、どちらに取ることもできるような表現になっている。

源氏の「いと屈じたりや」という言葉は、家で待つ「妹」に疑われやしないか、という歌を詠んだ蛭宮をからかう冗談の言葉として解釈されてきたが、そのやりとりが交された状況のわからにくさや、まるで蛭宮を揶揄するかのような意味合いの言

葉となってしまうことなど、釈然としない部分が多く、現行の

諸注釈においても意味をとりきれていないのではないだろうか。

また、『萬水一露』が、蜷宮の「花の香を…」の歌にある「えならぬ袖」という言葉を受けて源氏が詠んだ「めづらしと古里人も待ちぞみむ花のにしきを着てかへる君」の歌に、「源氏返哥心は朱買臣か心をもていへり」と注をつけ、『旧大系』『旧全集』『新大系』『新全集』が「花のにしき」に『史記』項羽本紀および『漢書』朱買臣伝を指摘している。

朱買臣は前漢時代の人で、家は貧しかったものの、歩きながら本の一節を口ずさむほどに読書を好んでいたが、妻は貧しさとその本の一節を口ずさむことを恥に思い、買臣と離婚する。さらに貧しくなっていた買臣はある日、別れた妻と再婚相手に衣食の施しを受ける。その後、官職を得た買臣は武帝に気に入られ、出身地である会稽郡の太守となった。このとき、武帝は「富貴にして帰らざるは、繡を衣て夜行くが如し、今、子、如何ぞや」と問いかける。かつて貧しかった買臣であるが、太守として会稽郡に戻り、文字通り故郷に錦を飾った。庁舎に向かう途中で、道路整備の仕事をするかつての妻とその夫を見かけ、二人を引き取り面倒を見ていたが、一ヶ月後、妻は自殺してしまふ。

しかし、「花のにしき」は、蜷宮が賜った薫物に関連することばであるはずだが、この謝礼の薫物に関わるやりとりでこの場面が締めくくられる意味についても、従来の解釈では充分に

生かされているとは言い難い^③。

四

このように、従来の諸注におけるこの場面の解釈はいささか問題が残るものであり、「いとくんしたりや」という源氏のことばの解釈が不充分であることがそれに関わるのではないかと考えられる。そこで稿者は、源氏の言葉、「いとくんしたりや」の箇所を「屈じ」ではなく、より薫物と関連性をもつ「薫じ」という動詞として解釈する方向を探ってみた。

「いと薫じたりや」として読んだ場合、源氏の言葉は従来の解釈よりも和やかで雅趣のあるものとして受け取ることができ、さらに、先立つて描かれた薫物合せと月下の酒宴という二つの場面から続くより一貫性があるやりとりといえるであろう。

まず、蜷宮が源氏に贈った「花の香をえならぬ袖にうつしもて事あやまりと妹やとがめむ」という歌の意味と、歌中の「妹」がさすものについて見ていこう。

蜷宮は、宴遊を終えて帰路に着く際に、光源氏から装束一揃いと薫物二壺を贈られ、その薫物と装束が芳しい香りを放っているために、「花の香を…」と、これを持ち帰ると家で待つ「妹」にどんな女と過ちがあつたのかと疑われてしまふ、と歌を詠んでいる。「妹」は、男が女を親しみをもって呼ぶ言葉であるが、このとき実際には蜷宮に妻はいない。

兵部卿宮、はた、年ごろおはしける北の方も亡せたまひて、この三年ばかり独り住みにてわびたまへば、うけばりて今は気色ばみたまふ。

(胡蝶③——一七〇)

と胡蝶巻にあり、連れ添った妻を亡くし独り住まいであるため、その寂しさを口実に玉鬘に求婚の意を示す螢宮の様子が語られている。また、そのすぐ後には、

宮は、独りものしたまふやうなれど、人柄といったうあだめいて、通ひたまふ所あまた聞こえ、召人とか、憎げなる名のりする人どもなむ数あまた聞こゆる。

(同③——一八〇)

と、独り身の螢宮の人柄が浮気っぽく、通っている女も数多あり、召人などの女房たちが大勢いるようだ、という噂を耳にした源氏の言葉が語られている。

梅枝巻の時点でも、その状況に変わりはないように考えられるため、螢宮の「花の香をえならぬ袖にうつしもて事あやまりと妹やとがめむ」の歌にある「妹」という言葉が指すのは、「妻」ではなく、その歌は誰ともしれないが家に女がいることを匂わせ、薫物のよい香りが移った衣を持って帰ると、その女に疑われてしまうかもしれないね、という戯れの歌と解せる。

次に、源氏が螢宮への贈物とした薫物は、螢宮の歌に「花の香」とあることから、薫物の中でも春のものとされる「梅花」であろう。⁽¹⁰⁾ その贈られた薫物の香りがすばらしいことに加え、源氏からの同じ贈物である装束に香りが移り、それを家を持ち帰れば、他の女との過失があったのではないかと咎められてしまう、という意味での螢宮の「花の香を……」の歌であるから、源氏もその答えとして香りにかけた「いと薫じたりや」と掛詞の趣きを併せて返した言葉と解せるのではなからうか。源氏の返しを「いと薫じたりや」とするならば、薫物の香りを賛美する意のこもった螢宮の歌に対して、「たいそうよく香っているですね」と同調する意味合いになるであろう。

また、「いと薫じたりや」という言葉は、「薫物二壺」「花の香」という直前の二語だけでなく、前述したようにここに先立つ薫物合せと月下の酒宴という二つの場面からもふさわしいやりとりであると考えられる。

源氏が明石の姫君の入内準備として催した薫物合せでは、源氏の依頼によって女君たちが各々の調合法によって製作した薫物が六条院に届けられ、居合わせた螢宮が判者としてその香りの判定をしているが、朝顔の前斎院から送られてきた薫物に添えられた和歌にも、螢宮が詠み込んだ「花の香」という言葉が見られ、そこではこの場面と同様に螢宮と源氏のやりとりが交されている。

沈の箱に、瑠璃の坏二つ据えて、大きにまろがしつづけ入れたまへり。心葉、紺瑠璃には五葉の枝、白きには梅を彫りて、同じくひき結びたる糸のさまも、なよびかになまめかしうぞしたまへる。「艶なるもののさまかな」とて、御目とどめたまへるに、

花の香は散りにし枝にとまらねどうつらむ袖にあさくしまめや

ほのかなるを御覧じつけて、宮はことごとし誦じたまふ。

(梅枝③—四〇六)

薫物が入られた箱に添えられた朝顔の前斎院の和歌に螢宮がじつと目を注ぐと、そこにはうつすらとした薄墨の筆跡で「花の香は……」の歌が書かれてあり、それを螢宮はわざとらしく口ずさんでいる。光源氏と朝顔の前斎院は、以前は源氏が熱心に追ひ求めるも朝顔の前斎院が頑なに拒み続け、今となつては生々しい男女間の相克を超越した関係にあつた。螢宮はそれを知つてか、源氏の思い入れの強い女君であるために大仰に振る舞い、ここでは反対に螢宮が源氏をからかっているのである。

薫物合せにおいては、螢宮は紫の上が調合した梅の花のような香りである薫物「梅花」を「梅花はなやかにいまめかしう、すこしはやく心しらひを添へて、めづらしき薫り加はれり」(同③—四〇九)とその薫りのすばらしさを賞賛している。

薫物合せの後、月明かりのもとと催された酒宴で、源氏と螢宮

は翌日の管絃の遊びの手慣らしに楽器を手入れしていた男性官人たちと合奏をしている。

内の大殿の頭中将、弁少将なども、見参ばかりにてまかづるをとどめさせたまひて、御琴ども召す。宮の御前に琵琶、大臣に箏の御琴まゐりて、頭中将和琴賜りて、はなやかに掻きたてたるほど、いとおもしろく聞こゆ。宰相中将横笛吹きたまふ。をりにあひたる調子、雲居とほるばかり吹きたてたり。弁少将拍子とりて、梅が枝出だしたるほど、いとをかし。

(同③—四一〇)

螢宮は琵琶、源氏が箏の御琴、頭中将である柏木が和琴、宰相中将の夕霧が横笛をそれぞれ奏で、柏木の弟である弁少将が拍子をとりながら、催馬楽・梅が枝を謡った。これが梅枝巻の巻名の由来ともなっている。

続けて盃を回しながら男君たちが和歌を詠み合うが、彼らの歌には梅とその香りに喩えた詞がたびたび登場している。

御土器まゐるに、宮、

「鶯の声にやいとどあくがれん心しめつる花のあたり
に

千代も経ぬべし」と聞こえたまへば、

色も香もうつるばかりにこの春は花さく宿をかれずも
あらなん

頭中将に賜へば、とりて宰相中将にさす。

鶯のねぐらの枝もなびくまでなほ吹きとほせ夜はの笛
竹

宰相中将、

「心ありて風の避くめる花の木にとりあへぬまで吹き
やよるべき

情なく」と、みなうち笑ひたまふ。弁少将、

かすみだに月と花とをへだてずはねぐらの鳥もほころ
びなまし

(同③—四一一)

蛭宮は、私が心を奪われている庭前の紅梅のあたりで、催馬
楽・梅が枝を謡う弁少将の鶯のような美しい声を聞くと、心が
体を抜け出して彷徨うことでしょう、と源氏に詠みかけ、源氏
は花の色も香りもあなた(蛭宮)に染みつくほど、今年の春は
花の咲くこの我が六条院に絶えることなくお出かけいただきた
いものです、と頭中将に盃を回し、頭中将は鶯が聒にしている
梅の枝もたわむほどに、夜半の笛竹の音色をもっと吹き通して
ほしい、と詠む。それを受けた宰相中将が、花を散らさないよ
うにとの心遣いから風が避けて吹いている梅の木に、鳥もいた
たまれぬほどに笛を吹きかけることができるだろうか、そうし

ては花に対する思いやりがいい、と言うと一同に笑いが起きた。
そして弁少将は、霞だけでも月と花との間を隔てずにいてくれ
るのであれば、月の光にもう夜明けかと勘違いして、梅の枝を
聒としている鶯も鳴き出すことでしょう、と歌を詠んでいる。

男君たちの歌には、「心しめつる花」「色も香も」「花さく宿」
「鶯のねぐらの枝」「花の木」「ねぐらの鳥」というように、梅
やその香りを想起させる詞が散りばめられている。

以上のように、薫物合せ、月下の酒宴と管絃の催しというこ
の日一日は、梅とその香りに象られている。また、源氏が蛭宮
に薫物の判定を依頼した際には、「いと苦しき判者にも当りて
はべるかな。いとけふたしや」(同③—四〇八)とあるように、
蛭宮は薫物の縁語である「けふたし」という語を用い、それぞ
れにすばらしい薫物の香りを聞き分ける判者という難しい役ど
ころを引き受ける苦心の意を表している。

そうした一日の終わりに、蛭宮が六条院からの帰り際に詠ん
だ「花の香を…」の和歌への返しであるため、梅とその香りに
準えた「いと薫じたりや」という言葉としてとるほうが、それ
ぞれの場面を通してより深い読みをすることが可能となり、
ひいては、薫物合せからはじまるその日一日を収斂させる言葉
になっているともいえる。

また、梅枝巻前半は、薫物合せ、月下の酒宴と管絃、そして
この源氏と蛭宮のやりとりという三つの場面で構成され、その
全てが香りを主題としている。続く明石の姫君の裳着から源氏

の仮名論という場面へと転換していく前に、香りとともに描かれた梅枝巻前半のしめくくりとしてもふさわしいのではないだろうか。

五

ここまで述べてきたように、読みの上では、源氏の言葉を「いと薫じたりや」として解することは可能であろう。

しかし、懸念すべきは当該箇所を「薫ず」の用例として認めるかどうかということになる。『源氏物語』には「薫ず」の用例は他に見受けられない。『源氏物語』と同時期の他作品に目を向けると、『栄花物語』に「薫ず」の用例が見られる。

仏の御前に螺鈿の花机、同じ螺鈿の高坏ども、黄金の仏器どもを据ゑつつたてまつらせたまへり。七宝をもて花を作り、仏供同じく七宝をもて飾りたてまつらせたまへり。火舎どもに色々の宝の香どもをたかせたまへれば、香薫じたり。所どころに宝幢、幡蓋懸け連ねたり。みなこれ七宝をもて合成せり。金の鈴柔らかに鳴り、日の午の時ばかりなるほどに、鐘の声しきりに鳴り、響世にすぐれたり（後略）

（『栄花物語』②—二七九）

治安二年（一〇二二）七月十四日、当時の東宮・敦良親王の行啓の際、法成寺の金堂は供養のための仏具で飾られていた。

香炉にはいろいろな尊い香が焚かれているため、よい匂いがあたり一帯に漂っていた、とある。数々の仏具が備えられた金堂に、香炉が発するよい香りがする、といった意味であるため、「薫ず」の用例としてもふさわしい。

実際、辞典類に目を向けると、『角川古語大辞典』は「薫ず」の用例として、「火舎どもにいろ／＼のたからのかうどもをたかせ給へれば、香くんしたり」と載せている。同様に、『小学館古語大辞典』、『日本国語大辞典』も、「薫ず」の用例として、この『栄花物語』の例を掲載している。

動詞「薫ず」の確実な用例は少ないが、『栄花物語』の用例があり、存在したことは確かである。今問題としている梅枝巻の「いと屈じたりや」は、『角川古語大辞典』では「屈ず（くんず）」の用例として、『小学館古語大辞典』では「屈す（くつす）」の用例としてあげられている。

しかし、『栄花物語』の例が、金堂に備えられた香炉が発する香りにのみ焦点をあてた「薫ず」であるのに対して、今回取り上げた『源氏物語』梅枝巻の「薫ず」は前にも述べたように、薫物合せからはじまるその日一日を象り、収斂する言葉になっている。よって、この本文は本来、動詞「薫ず」の用例として掲げられるべきではないか。

六

梅枝巻冒頭から描かれた薫物合せと月下の宴遊は香りによつ

て象られ、物語の場面を紡ぎ出す上で香りという要素が重要な役割を担っている。

源氏の愛娘・明石の姫君の入内準備の一環として、正月の余暇に行われた薫物合せでは、源氏の依頼を受けた女君たち各々の調合法を用いて製作された薫物が六条院に集められ、判者として居合わせた蛸宮によって、それぞれの微妙な香りの違いが判定された。そしてその判詞は、それぞれの香りを調合者である女君その人の個性に結びつけたものでもあった。その後に行われた月下の宴遊では、蛸宮と源氏、そして男性官人たちが樂器の合奏をし、官人の一人、弁少将によって催馬楽「梅が枝」が謡われ、盃を交しながら詠み交わされた和歌には、梅やその香りを想起させる詞が散りばめられていた。

その日一日の終わりに源氏と蛸宮の間で交されたやりとりを、従来のように「いと屈じたりや」とするのではなく、「いと薫じたりや」と解するほうが、本文の問題、物語の場面と流れ、そのいづれにも添った読みと解釈ができることは、前に述べたとおりである。

梅枝巻のみならず、『源氏物語』において香りはさまざまな場面に描かれている。香りの表象が物語の中でも重要な役割を担い、多様な働きをしている。その香りに焦点を当て、香りを主題として描かれたのが、梅枝巻の薫物合せに始まり、「いと薫じたりや」で終わるこの正月のとある一日だったのである。源氏の「いと薫じたりや」という言葉は、蛸宮への返し言葉

として機能するだけでなく、それまで『源氏物語』で描かれてきたさまざまな香りを集約する言葉となっている。言い換えれば、香りという視座における『源氏物語』を表象する言葉として機能していると考えられる。

「いと薫じたりや」という言葉は、蛸宮の薫物合せにおける判者としての努めと、微妙な香りの違いを判別したことへ対する感謝と賞賛、また、明石の姫君の入内準備としての薫物合せを行えたことの源氏自身の安堵の気持ち、そして、官人たちの宴遊という場と薫物合せから始まった今日一日の総括といった様々な感情や思いを凝縮した言葉となっている。

翻って言えば、蛸宮に対して「いと薫じたりや」という言葉を投げかけることで、薫物合せと宴遊というこの日をより一層印象づけ、さらには、薫物合せに象徴されるように、光源氏ひいては六条院世界が有する香りにおける文化レベルの高さをも顯示する狙いがあつたのではないだろうか。

香りに象られた薫物合せと月下の宴遊という梅枝巻の二つの場面は、源氏の准太上天皇という未曾有の栄華への到達を語る次巻・藤裏葉巻の大団円への準備として、六条院世界の繁栄に香りの持つ超越性を付与することが不可欠だったために描かれたといえる。ゆえに、源氏の言葉は「いと薫じたりや」として解釈されるべきであり、そのように解釈することで、この物語が内包する香りの表象に一貫性が付与されることとなる。

源氏が蛸宮に対して発した「いとくんじたりや」は、それが

「屈じ」か「薫じ」なのか、という単なる一語の解釈にとどまる問題ではなく、『源氏物語』をとおして描かれる香りの表象、ひいては物語の主題的読みに関わる重要な論点なのである。

梅枝巻以降も、香りは物語において数多く登場し、さまざまな場面で機能している。そのことはいわゆる第三部の主人公である二人の公達が、薫と匂宮という香りにちなんだ名前を持つことから明らかである。そうした『源氏物語』における香りの様相を今後もさらに追究していきたい。

注

(1) 本稿における『源氏物語』本文の引用は、『新編日本古典文学全集 源氏物語』(小学館、一九九四～一九九八年)(以下、『新全集』と略記する)に拠り、その巻数と頁を示した。

(2) 『古典全書』『旧大系』『旧全集』『集成』は「屈じ」とし、『新大系』は「屈し」とする。

(3) 『源氏物語大成』の底本、大島本では「いとくつしたりや」とするが、疑問が残る。後述する。

(4) 大島本の複製は、角田文衛・室伏信助監修『大島本源氏物語第五巻』(角川書店、一九九六年)に拠る。

(5) 河内本の異同は加藤洋介『河内本源氏物語校異集成』(風間書房、二〇〇一年)に拠る。

(6) 別本の異同は源氏物語別本集成刊行会・伊井春樹・伊藤鉄也・小林茂美『源氏物語別本集成 第七巻 野分―梅枝』(おうふう、

一九九四年)に拠る。

(7) 本稿における『枕草子』本文の引用は、『新編日本古典文学全集 枕草子』(岩波書店、一九九一年)に拠り、その頁を示した。

(8) 本稿における『萬水一露』の引用は、『源氏物語古注集成第二六巻 萬水一露』(桜楓社、一九九〇年)による。

(9) 『漢書』朱買臣伝の故事を引く解釈が主流ではあるが、『源氏物語』の内容とは大きく異なり、この箇所解釈としても隔たりがある。

(10) 十二世紀に集成された薫物の史料で、藤原定長(寂蓮法師・一一三九?～一二〇二)の撰とも言われる『薫集類抄』の梅花の項には、「擬梅花之香也。春尤可用之。」とあり、梅花は春にふさわしい薫物であることがわかる。

(11) 本稿における『栄華物語』本文の引用は、『新編日本古典文学全集 栄華物語』(小学館、一九九五～一九九八年)に拠り、その巻数と頁を示した。

(たけい・たつゆき/本学博士後期課程二年)